

# 問題提示

## 意欲を引き出す効果的な提示方法を求めて

### 身近な素材

#### (1) 私たちが主人公？ 教室内の出来事で

低学年では、子ども達の興味をいかに授業に引きつけるかがポイントである。そこで、身近な学級内の出来事をときに素材として取りあげてみた。1年生の「ひきざん」の学習。昼休みに教室に残っている人数を求める問題を扱った。

提示された右の表を見て、いろいろなつぶやきが子ども達から聞こえてきた。

C: 「ぼくは、いつもそとであそんでいるよ。」

C: 「2くみのほうが1くみよりおおいね。」

C: 「わたしたち3くみは、なん人かな？」

のこっている子のかず

1くみ 18人

2くみ 19人

3くみ ?

そして、子ども達の関心が高まったのをみて、次のような問題を提示した。

3くみは35人です。ひる休みに20人の子がげんきよくそとであそんでいます。きょうしつにのこった子は、なん人でしょう。

このように身近な生活素材を扱うことで、子ども達の関心度もずい分と違うものである。子ども達を問題に参加させよう！

#### (2) 教室でかくれんぼするの？ 遊びを生かして

本時は、2年生の「せいりのしかた」の導入で、「物を数え、それらを分類・整理する」ことをねらいとした授業である。子どもの大好きな遊びである「かくれんぼ」を素材に取り入れる実践を試みた。また、全校研究授業であったため、参観した先生方にも協力してもらった。黒板には、運動場にあって隠れ場所となる「トンネル山」「木」「朝礼台」「バックネット」の絵が貼ってある。

T: 「今日は教室でかくれんぼをします。」

C: 「えー、教室なんかでどうやってするの？」(子どもたちは不思議そうな顔をしている。)

T: 「全校の35人の先生方が、今からこれらの4つの場所に隠れるからね。みんなは鬼だよ。ちゃんと隠れるまで見てはだめだよ。」

C:「わかった。よし、がんばって見つけるぞ。」

ここで、音楽で習ったばかりの「かくれんぼ」の歌をテープで流す。子どもたちは、机に顔をふせながらも、胸をわくわくさせて歌っている。その間に、先生方がそれぞれ自分の姿を描いたペープサートを、黒板の隠れ場所の絵の裏に隠すのである。

C:「もういいかい?」

T:「もういいよ。」(さあ、これからが子ども達の出番である。)

C:「わー、あそこにかくれているよ。」

「トンネル山が一番多くにかくれているんじゃない?」

「いや、バックネットだよ。」

先生、数えたいよ。」 (子どもたちのつぶやきが教室中に広がる...。)

こうして、教室内でのかくれんぼから、本題である算数の学習へとつながっていったのである。

## 絵図の利用

### (3) 問題文は書かなくていいの? **絵図で表しよ**

算数が始まり、教師はまず黒板に問題文を書く。子ども達はそれを黙ってノートに書き写す...授業の導入がこんなワンパターンに陥っていないだろうか。特に高学年になるほど、この傾向は強いかと思う。そこで、4年生の「式と計算」の単元では、次のような問題提示の方法に変えてみた。

教師は、問題文をゆっくりと口頭で読みあげる。

子ども達は、問題場面を簡単な図や言葉でノートに書き表す。

<この方法のよい点>

- ・言葉を聞き漏らさないようにと、子ども達の集中力が高まる。
- ・問題をより自分のものとしてとらえ、学習意欲が高まる。
- ・図で表す能力が伸びる。
- ・問題文を書かせる時間が省け、効率がよい。

毎時間、図の表し方を個別に指導したり、全体場でよいものを認めたりすることで、矢印の使い方などを工夫して簡潔明瞭な図を描く子が増えてきた。計算領域で同じような内容の学習が続くときには、これは有効な方法であった。

## (4) ねえ聞いて、こんな問題つくったよ **お話づくりで**

ひらがなを正しく読む力に大きな個人差がある1年生の子ども達。長くつながったひらがなの列を見ただけで意欲を失ってしまう子や、ひらがなが読めても、問題文の意味がつかめない子もいる。そこでみんなでいっしょに問題の内容を理解するために、次のようなお話づくりの活動を取り入れた。

1年生の「ひきざん」の実践例。黒板に提示された問題場面を表す絵やペープサートを見て、子ども達がお話をつくり始める。

C: 「すなばにこどもが4にんいます。3にんきました。あわせてなんにんでしょう。」

C: 「あっ、ひきざんもできる。」

C: 「すなばに4にんいて、3にんかえると...。」

C: 「すなばには7にんいたんだよ。3にんかえると、のこりはなんにんでしょう。」

こちらが意図した問題ができたところで、

なんにんのこるでしょう。

と板書する。このときの留意点として、1学期の子どもの実態にあわせて、課題文はなるべく簡潔にまとめるように心がけた。

ひらがなが十分に読めないために、問題をつかむ段階でつまずき、むずかしい。おもしろくない。」と算数を感じている子も、問題場面のイメージを楽しくつかむことができる活動である。

## .....**ドラマチックに**.....

## (5) 三角星人がやってきた！ **キャラクターを作って**

高学年になると、「算数は苦手だ。」といった意識を持つ子が多い。それを少しでも取り払い、また意欲を高めるために、キャラクターを取り入れた実践を試みた。本時は、5年生の「合同」で「三角形の作図条件を求める」授業の展開である。

T: 「この平和なクラスに、あるメッセージが届いた。それは、三角形星に住む『三角形星人』が、このクラスを自分達のものにしようとたくらんでいるらしいと。」

C: 「三角形星人？ なにーそれ。」

C: 「そんなもんおるわけないやん。」（言いながらも、身を乗り出して聞き出す。）

T: 「でも、ある三角形の問題を解けば、それをあきらめると言っているよ。」

C: 「問題ってなに？」

（ここで、長さや角の大きさが何も記入されていない三角形を見せる。）

T: 「これと形も大きさもまったく同じ三角形をノートに書くこと、これが問題だよ。」

C: 「先生、長さや角度がわからんやん。」

T: 「実は三角形星人はケチでね。6つの条件のうち、たった3つしか教えてくれないと。みんなはこの長さや角の大きさが知りたい？」

C: 「うん...。」

こんなやりとりから授業は始まったのである。高学年の子ども達でも、いつもとは違うキャラクターの登場に興味を持って、楽しく問題に取り組むことができた。

## (6) 南の島の探検へ出発！

## ドラマ性を持たせて

教師も子どももいっしょになって、楽しく算数の学習を進めたい。そのために、こんなドラマ性を持たせた問題提示をしてみたが、ときにはどうだろうか...

6年生 「図形の拡大と縮小」の実践より

T: 「わが6年組へ、外国からこんな郵便物が届いたよ。」

C: 「どこから送ってきたの？」

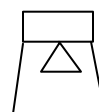
T: 「送り先は、え~と、『南太平洋のイースター島』だね。」

C: 「あっ、知ってる。モアイ像があるところだ。」

T: 「そのイースター島にいる先生の友達が、モアイ像についてある調査をみんなにお願いしたいということで、こんな依頼書が入っていました。読みあげるよ。」

ある日、古代人が宝物をかくしたと思われるモアイ像の図Aが見つかった。ここにあるア、エの写真のうち、どのモアイが本物が調べてほしい。

図A



辺の長さや角の大きさを比べて、図Aと形が同じモアイを見つけよう。

